

姫路の君主：酒井家(1749-1871)

姫路の最後の封建時代の支配者

酒井家が 1749 年に姫路藩主となり、日本の封建時代に終わりを告げた 1868 年の明治維新までその座を守った。姫路は裕福な領土であったが、19 世紀初期までにその経済は緊迫していた。酒井忠道公(1777-1837)は改革を命じた。藩の資金から金の流出を止めるため、地元の特産品である綿は藩で発行された紙幣だけで売り買いされるよう規定した。このことと他の新規計画が成功し藩の経済が安定した。酒井家はそれから、沿岸防衛と農民一揆の鎮圧のために兵士を領土の境界線を越えて配置するという新しい責務を負うことになった。

姫路における明治維新と江戸時代の終わり

1868 年、徳川支配に反対する一連の藩が日本の武士による支配を覆し、将軍を辞任に追いやり、明治天皇(1852-1912)に日本の政権を取り戻させた。姫路とその支配者たちは徳川幕府（1603-1868）と深く結びついていた。酒井忠績公(1827-1895)は将軍にとって大老であり、藩の軍隊は江戸(東京)湾と京都を守る責任があった。戊辰戦争(1868-1869)、それは新明治政府と追放された徳川の支持者を戦わせたものだったが、そのときは姫路出身の兵士が 15 代で最後の将軍である慶喜(1837-1913)を大阪城で守った。近隣の藩である備前出身の明治支持の兵士が姫路に襲いかかり、藩の軍隊を打ち負かし、そして城を降伏させた。

芸術がわかる藩主

姫路城の多くの君主は絵画と書道に優れていた。酒井忠以(1756-1790)と彼の弟抱一(1761-1829)は特に優れた画家で彼らの作品はとても評価されている。

富士山の景色、酒井忠以

雀の子、酒井抱一

酒井忠以